

日本が金融危機に陥った一九九七年から、政治家や官僚に「手紙」を送り続けている。米園育ちの民主主義的な発想だ。渋沢栄一の五代目、金融のプロは「へえ」と「とりあえず」が日本を変えろ、と話す。

丸の内  
サムライ列伝

20

# 五代先祖は渋沢栄一

渋沢栄一の五代目：そんな肩書きが常について回るのはどんな気分だろうか。「いや、ずっとアメリカで暮らしていたせいか、渋沢栄一を意識したことはありませんでしたね」。小学校三年生のとき父の転勤で渡米、以来大学卒業まで米園暮らし。起業、独立の前後、渋沢栄一の莫大な資料を読み漁り、偉大さと共にその思想が今の時代にも通じることを発見した。

「渋沢栄一とヘッジファンドにリスクマネジメントを学ぶキーワードはオルタナティブ」という自著も上梓した。「五百もの会社を起こした人です。よやく一社立ち上げた僕など、比べようがありませんが笑」。その会社、シブサワ・アンド・カンパニーは著作にもあるようにオルタナティブ投資を専門とする独立系の投資コンサルタント。株式・債券

がマーケットに左右される相対収益を目指すのに対し、オルタナティブ投資はヘッジファンドやベンチャーキャピタルファンドなど、マーケット状況に関わらず絶対的収益を追求する目的を持った運用手法なので注目を集めている。

「日本ではまだ運用会社は金融グループの系列会社が主流ですが、海外では独立系が多い。当社では、オルタナティブ投資マネジャー紹介とともに、独立系の新興マネジャーの支援を、一つの柱に据えています」

長い海外生活で外から見た日本、口本人は「一人ひとり自分たちで思っているより魅力的。しかしその良さが組織に入ると埋没してしまう。個が活きる社会が日本再生への道だと思います」。

政治家や官僚に手紙を送るのも個

である。個を集結するため「プロジェクト十三%」を立ち上げた。十三%は普及率の臨界点で、それを超えると爆発的に伸びるといわれる。「今の日本に鬱屈したものを感じている人たちは多い。そのベクトルが臨界点を超えれば新たな何かが起こるのでは」。

しかし大上段に構えているわけではない。行動は「へえ」と「とりあえず」から。「へえ」は何気ない驚きであり、ひらめきにつながる。そして「とりあえず」やってみよう、と。そんな話を友人にしたら「へえ」はテレビで大人気と聞いてショックでした(笑)。ムダ知識だけじゃないんですよ」。

家庭では三歳を頭に二歳、一歳の三人の男の子の父、現在の趣味は？の問いに「子どもと遊ぶことです」と笑顔で即答した。

シブサワ・アンド・カンパニー代表取締役  
(千代田区丸の内3-4-1 新国際ビル4階)

1961年生まれ。明治の大実業家・渋沢栄一の五代目子孫。小学2年生から米園暮らし。テキサス大学卒業後、84年(財)日本国際交流センター就職。85年UCLA大学MBA経営大学院へ入学、87年に卒業後、ファーストボストン証券NY本社入社、その後JPモルガン銀行東京支店、JPモルガン証券、ゴールドマン・サックス証券を経て96年に大手ヘッジファンドのムーア・キャピタル・マネジメントへ。翌年には同社東京駐在事務所を設置、代表に。そして01年に同社を退職、現職。経済同友会幹事。今年4月から文京学院大学大学院客員教授に就いた。著書に「渋沢栄一とヘッジファンドにリスクマネジメントを学ぶキーワードはオルタナティブ」(日経BP社)、政治家や官僚に送った手紙をまとめた「シブサワ・レター 日本再生への提言」(実業之日本社)。



しぶさわ けん けん  
プロフィール